

白痴

町工場、商店、安アパートの雑居した戦中の下町。

伊沢、一軒の離れを借りて住む。母屋は一階に家主が住み、二階には母子、娘は父の判らない子を孕んでいる。庭には豚、犬、鶏、あひるが放し飼い。

二階の娘は元・町会の事務員。町会事務所に寝泊まりするうち、出入りの人全部と関係して妊娠。皆で拠出金を出して世話したが、豆腐屋だけはいつまでも通い、妾同然にしたので、皆は金を出さなくなった。

向かいの煙草屋の婆さんは、七人目か八人目の愛人を追い出して、次は坊主にしようか、何屋にしようかと煩悶中。

近くの小金持ちの未亡人、男女二人の子がいる。兄と妹は近親相姦だが、兄に女が出来たので、妹を六十近い年寄りの嫁にやろうとしたら、猫いらずを飲んで死んだ。町医者には心臓麻痺の診断書を書いてくれた。親切な医者もあるものと言うと、仕立て屋は逆に驚いて、よそじゃそうじゃないんですか。

辺りに林立する安アパート、その何分の一かは淫売と妾。この手の女には子供がなく、また部屋を綺麗にするという性質があるので、家主からは好まれている。私生活の乱脈、背徳性は問われない。

アパートの半数以上は軍需工場の寮となり、女子挺身隊の集団が住んでいる。誰其の愛人、課長の戦時夫人、重役の二号、産時給の女子が多い。戦時夫人とは、本妻が疎開している間の夫人をさす。月五百円の妾は、一戸建てに住む。

海軍少尉の家には、本宅よりも立派なセメント造りの防空壕がある。軍人配給で、魚、コーヒー、缶詰、酒に不自由しない。

新聞記者を辞めて、映画会社に勤める伊沢。その隣人は三十前後の狂人。そこそこ資産はあるが、内部は伺い知れない。母親は強度のヒステリー、二十五、六の妻は白痴。ある年、四国遍路に出た狂人、白痴の女房を連れ帰る。

防空演習に集まる人々の前で、火もないのにバケツで水を汲み、演説を始めた狂人。しかし、日頃は温和しい、よっぽど慎み深い。気遣いは笑いたい時に笑い、演説したい時に演説し、あひるに石をぶつかけたり、二時間くらい豚の尻や顔を突ついたりする。けれど、彼らは本質的には遥かに人目を恐れている。彼らの生活は概して物音が少なく、無用の饒舌に乏しい。

白痴の女房は無口で温和しい。配給所に並ぶだけで、煮炊きは出来ない。ヒステリーの姑に追われると、こちらの豚小屋に逃げ込む。

新聞記者だの映画の演出家などは、賤業中の賤業。彼らの心得ているのは時代の流行だけ、動く時間に乗り遅れまいとするだけが生活。自我の追究、個性や独創というものはこの世界には存在しない。ああ日の丸の感激の、兵隊さんよありがとう、戦意昂揚の映画作り。吟味しない言葉、歴史を顧みない無思想ぶり。個性だの独創だのと言うと、部長に叱られる。

演出家同士、企画部員同士で徒党を組み、保身を計る映画会社の内幕。各自の凡庸さを擁護し、芸術の個性と天才による争覇を罪悪視し組合違反と心得て、相互扶助の精神による才能の貧困の救済組織を完備していた。内にあつては貧才互助組織が、外にあつてはアルコール獲得組織で、戦時下にありながら連日ビール三、四本を空けて、酔いながら芸術を論じている。

会社でラバウル死守という企画を立てている内に、米軍はラバウルを通り越してサイパンに上陸。サイパン決戦の企画会議も終わらぬ内に、サイパン玉砕。本土空襲に慌てて、焼夷弾の消し方、じゃが芋の作り方、

といったフィルムを作る。

終電で帰宅した伊沢、押入れの中に白痴を見つける。不安げな眼だが、怒らないでいると、呆れるほど落ち着く。小声でぶつぶつ、手が痛いとか、ごめんなさいとか言う。

深夜に帰すのも気が引けるし、朝まで預かるのも後難が怖い。戦時下の大胆さで、これを試練としようと伊沢。ふたつの寝床を敷き、女を寝かせる。消灯すると、女は寝床を出て、部屋の片隅にうづくまる。その繰り返し。決して手を触れないからと念を押しても、小言を繰り返す女。私は嫌われている、来なければよかった。すべてを理解する伊沢。女は叱られて逃げて来ただけではなく、伊沢の好意も当てにしていたのだ。だから、抱擁してやらねばならない。消灯しても男の手が触れないのは、嫌われているからだと解釈する白痴。

女を寝床に寝かせて、その枕元に座り、自分の子供、三つ、四つの娘にするように額の髪を撫でてやる伊沢。月二百円の月給だけが惜しくて、嫌な会社勤めを続ける伊沢。妻を娶らないのも、生活苦に追われるのが嫌だからだ。しかし、この白痴女は煮炊きさえ知らない。二百円の悪霊すら、この魂には宿る事ができないのだ。女の髪を撫でる事によって、二百円の悪霊と絶縁できるような気持ち。

それから勤務を続ける伊沢、押入れには白痴の女が残される。

連日の警戒警報、空襲警報。

すぐ近所に二時間の空襲。五百m離れた所への爆撃で、地軸もろとも家は揺れ、爆音とともに呼吸も思念も中絶する。同じ爆弾でも、焼夷弾と爆弾では凄みにおいて青大将と蝮くらいの違いがある。焼夷弾にはガラガラという無気味な音響が仕掛けてあるが、地上の爆発音がなく、その音は頭上でずっと消えうせるので恐怖感に欠ける。爆弾は落下音こそ小さいが、ザア

という雨降りの音のような一本の棒を引き、こいつが最後に地軸を引き裂くような爆発音を起こす。一本の棒にこもった凄みさえ論外。まして、ズドズドズドと爆発の足が近づく時の絶望的な恐怖とときは、額面通りに生きた心地がしない。おまけに飛行機の高度が高いので、ブンブンという頭上通過の米機の音も至極かすかに何喰わぬ風に響いて、まるでよそ見をしている怪物に大きな斧で殴られるようだ。

押入れの中で、恥も照らいもなく恐怖にゆがむ白痴の顔。爆撃のさなか、四、五才の幼児は奇妙に泣かない。眼を見開いて黙った様子は、不安や恐怖を克服して、大人より理性的に見える。しかし白痴は、理性も抑制もなく、苦悶と恐怖に顔を歪めて涙さえ流している。盲目の孤独、芋虫のような孤独。

三月十日の大空襲、その後の散歩。倒れた民家の間に飛ばされた女の脚、腸の飛び出した女の腹、ねじ切れた女の生首。そこそこに散見する人間の死体は、焼き鳥と同じだ。犬と並んで一緒に焼かれている死体もある。

四月十三日、二度目の夜間大空襲、池袋、巣鴨が被害。罹災証明を手に入れて、埼玉まで買い出しに出る伊沢。

疲れて帰った十五日、警戒警報。旅装のまま、リュックを枕に眠る。気付くと、近所のラジオの騒音、敵編隊は伊豆南端を通過。手に入れたばかりの歯磨き粉で歯を磨く爽快さ。それと、芳香のある昔の化粧石鹸とを忘れずに、防空壕に入る。頭上には十数本のサーチライト、光芒の真ん中に米機がぽっかり。眼をおろしたら、駅前の方角は火の海。

焼け出されるので、防空壕の中に居てはいけない。頭布を被り、布団を被って、軒下で空を見上げる伊沢。二十五機を数えた所から、ガラガラとガード上を貨物列車が駆け去るような焼夷弾の音。それは頭上を越して、工場地帯へ集中。そこはもう、火の海。呆れた

事に、今までの編隊とは正反対の方向からも編隊が来て、また爆撃を加えている。ラジオは止まり、空一面は赤々と厚い煙の幕に覆われ、米機もサーチライトも見えない。北方を残して四圍は火の海、その火の海が次第に近付いて来る。

用心深い仕立て屋は、家財道具一切を防空壕に入れて、目張りをし、土も掛けている。さらに、リヤカーに食糧と日用品を積んで、一緒に引き上げようと言う。一瞬の遅延が命取りだ。しかし、白痴の手を引く所を近所衆に見られたくない伊沢、仕事があると断る。

道は遠近の避難民で埋め尽くされている。米機の爆音、高射砲、落下音、爆発音、足音が入り乱れる。平静を繕うが、間違いになりそうな気持ち。

鼓膜の中を掻き回すような落下音、それが頭上に。いったん伏せて、起き上がると、間違いの家が火を吹いている。気が付くと、左右の家も、アパートも火を吹いている。家へ飛び込み、白痴の女を抱いて、布団を被って外へ。

四圍は火の海、十字路からは混雑する避難民で先へ進めない。群衆が向かっている方向は、一番火の手が少ない。しかし、そちらには畑も空地もない事を知る伊沢。次の焼夷弾が行く手を塞ぐと、退路を断たれる。ふり向くと、また別な道。両側の家々が燃え狂っているのだが、そこを越すと小川が流れ、さらに遡ると麦畑に出られる。誰もいない猛火の道を見ると、伊沢の決意も鈍るが、百五十m先で一人の男の姿に勇気を得る。

白痴とともに、布団を被って猛火の中へ進む伊沢。つい、群衆の方へ引き返そうとする白痴を説得し、呑み込ませる。稚拙なうなづきが、伊沢を狂おしいほど感動させる。女が表した初めての意志、そのいじらしさに逆上。今こそ人間を抱き締めており、その人間に無限の誇りを持つ。

道の両側は火の海だが、すでに棟は落ち、熱気は

衰えている。溝があれば水を被り、布団を水に浸して被る。

やっと小川に着く。小川の両側の工場は猛火だが、梯子をつたって河床に降りる事ができる。三々五々、川の中を歩く人たち。白痴の女は言われずとも、自分から体を水に浸す。犬ですらそうせざるを得ない状況。

川を上がると、三方を丘に囲まれた麦畑。地平線上の住宅、銭湯、工場、寺院などが燃えており、各々の火の色が、白、赤、橙、青と、濃淡とりどり違っている。

麦畑にいるのは数百人で、国道をゆく群衆に比べると、ものの数ではない。私疲れたの、足が痛いのと、いう喧きのうち三つに一つは眠いと言う白痴。眠らせてやる。警報が解かれて、去る群衆。巡査が来て、焼け残った学校に集まるよう勧める。しかし、白痴を寝かしたままにする伊沢。

朝になると冷え始めて、燃え続ける家で暖を取りたいと思うが、女の為に動かない伊沢。